

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ大阪13のための書き下ろし

叙述トリック症候群

作…庵^{あん}字^じ

「警部から連絡が来たよ。すぐに事件現場に行こう——」
「ちょっと待て」

「……どうした？」

「お前は……男だよな？」

「はあ？」

「確認する。お前は確かに男だな？」

「そうだよ。いったいどうしたの？ 突然」

「疑ってるに決まってるだろ」

「疑ってるって、どうして？ 見てのとおり、僕は間違いない——」

「バカ！ 見てのとおり」 って、どうやって見ればいいっていうんだよ！

「はあっ？」

「見られるわけがないだろ！」

「何を言ってるんだ？」

「だって、俺たちは『文章だけの存在』じゃないかよ！」

「ええっ？ そ、それって、もしかして……」

「ああ、そうだよ。俺は……この小説に叙述トリックが仕掛けられているんじゃないかって、それを疑ってるんだよ！」

「僕は、本当は女性なんだけれど、読者が男性だと誤認するような書き方がされているんじゃないかと」

「それで、ラストで『実は女性でした』って明かされて、読者は、うわ！ びっくり！ って。お前の人称だって、いわゆる『僕っ子』ってやつで」

「叙述トリックでは、よくある手だけれど」

「じゃあ、俺は？ 俺はどうだ？」

「どうだって、性別のこと？」

「そうだよ。俺は男か？」

「男だよ」

「それと」

「なに？」

「お前は本当に人間か？」

「はあ？」

「人間以外の動物か何かなのに、あたかも人間かのように思わせて書かれてるってことはないのか？」

「ないよ。僕は確かに人間だよ」

「じゃあ、俺は？ 俺はどうだ？」

「君も人間に間違いないって」

「まだあるぞ」

「なにが」

「今は本当に現代か？ 現代で、しかも日本か？」

「なにを言ってるの？」

「本当はずっと過去の話なのに、あたかも現代が舞台であるかのように装って書かれているって、そういうことはないか？」

「ないよ」

「本当か？ じゃあ、場所は？ ここは日本か？ 本当は外国なのに日本だと誤認するように書かれてるってことはないか？ あるいはその逆とか」

「間違いない日本だよ。どうしてそこまで疑うの」

「俺は、叙述トリックが大嫌いなんだよ！」

「ミステリの登場人物とは思えないセリフ」

「どうしてだよ！」

「今のミステリ界は、叙述トリック抜きには語れないでしょ」

「それが許せないって言ってんだよ！」

「どうしてそこまで嫌うの？」

「ミステリだって小説だろ。小説ってのはさ、その世界に没頭しながら読むべきものだろ。それが、叙述トリックとかいうやつが幅を利かせたせいで、全部ぶち壊しになっちゃったんだよ！」

「どういうこと？」

「もうさ、特に最近のミステリを読むときにはさ、まず、『こいつは本当に男、あるいは女なのか？』『こいつは本当に人間なのか？』って疑ってかからないとダメになっちゃっただろう！」

「そんな神経質な読者はいないでしょ」

「いるよ！どこかに叙述トリックが仕掛けられてるんじゃないかって、気になって気になって、作品の世界に入っていけなくなるんだよ！テキストを信用できないから、読者と作品との間に終始壁が出来ちゃって、読者が作品に入り込むことを阻害しちゃうんだよ。叙述トリックってやつ弊害だよ！」

「そんなことはないと思うけど」

「だから、今後、叙述トリックを使う場合は『この作品には叙述トリックが使われてます』って最初に書いておけよ！」

「叙述トリックの意味がなくなるよ！」

「そうすれば、『ああ、このミステリには叙述トリックは使われていないな』って安心して読めるようになるんだよ！作品世界に入っていけるようになるんだよ！」

「でもさ、そういう『気持ちよく騙されたい』っていう需要もあるでしょ。だからこそ、叙述トリックがこれだけ流行してるんだし」

「何だよ『気持ちよく騙されたい』って、何で騙されて気持ちいいんだよ、変態かよ！」

「ミステリが好きっていう時点で、ある意味みんな変態みたいなものだから」

「とにかく、この小説についてだけは、はっきりさせようぜ。叙述トリックは使われていない、って」

「だから、さっきから言ってるでしょ。君も僕も、確かに男性で、人間で、舞台は現代日本。絶対に間違いはないです」

「信用できないな」

「どうして？」

「だって、登場人物の口からなら、どうとだって言えるだろ。主観視点なら、女装した男のことを『女性』って表現してもアンフェアとはならないわけだし」

「じゃあ、どうすれば信用してもらえるわけ？」

「地の文だよ」

「地の文？」

「そうだよ。三人称の地の文で明言してもらえれば信用するよ。三人称って、神の視点だから、絶対に虚偽の記述は出来ないからな」

「そういえば、この小説にはまだ地の文が出てきてないね」

「おい！地の文！出てこいや！」

呼んだ？

「お前の視点ではっきりと書いてくれ」

「地の文と会話をするな」

「この小説には叙述トリックなんて使われていないって、地の文の記述で証明してくれよ！」

いいよ。君たち二人とも、間違いなく人間の男性だし、舞台も現代日本だよ。

「よかった……。さあ、これで心置きなく小説を続行できるぞ」

それは無理。

「どうして？」

もう紙幅がないから。

「紙幅？」

そうだよ。時と場所を正確に書くとな、時は西暦2025年9月14日、場所は大阪市住之江区にあるインテックス大阪2号館。ここでは現在、「文学フリマ大阪13」というイベントが開催されていて、これは「おー59、60」のブースに出店している「新生ミステリ研究会」が配布した無料短編なんだ。もう残り数行しかなくて小説を進めるのは無理だから、宣伝に使っちゃうね。ブースには面白いミステリ小説をたくさん置いてあるから、これを読んだみんな、ぜひブースに遊びに来てね。新刊の『マイス・メガロミアック』上下巻、各800円で発売中！

「おい！やめろ！俺はメタミステリも大っ嫌いなんだよ！」

ホームページも開設しているよ。下のQRコードから訪問して

みてね。作品の感想なんかも書いてくれると嬉しいな。

「だから、やめろって！」

(本当に 了)



(了)